



三里塚駅から成田に向かって走る。鉄道連隊の  
双合型を分割したCタンクB6号（昭和14年撮影）

## 成田 歴史 玉手箱

**歴史と伝統文化の  
まち・成田。市内に  
は、歴史ある文化財  
が多数あります。**



### 成田鉄道多古線・八街線

## 超鈍行で、線路幅は日本で最小の60cm

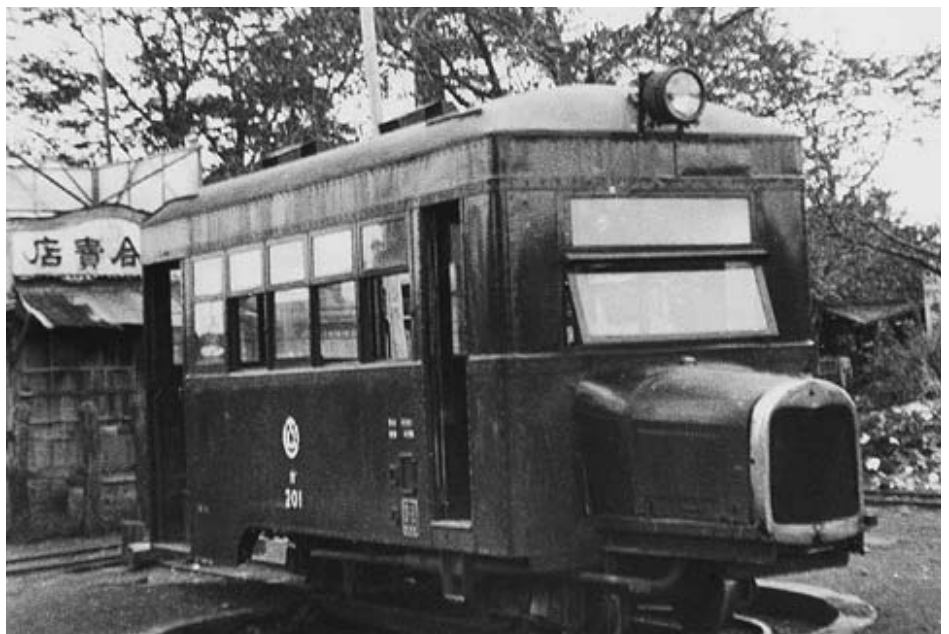
成田鉄道多古線は、明治44年7月に成田～三里塚間9.7km、同年10月に三里塚～多古間13.8kmが開業し、駅は成田―裏成田―東成田―法華塚―三里塚―千代田―五辻―飯笹―染井―多古の10駅が設けられました。通称、軽便鉄道と呼ばれ、陸軍鉄道連隊の手によって工事が進められました。

この多古線の特徴は、日露戦争時にドイツから輸入した特別規格品を借り受けて使用したために、線路の幅が600mmとわが国最小のもので（成宗電車は1435mm、国鉄は1067mm）、機関車は双合式のSLを使用し、客貨車は軍用の無蓋貨車を改造し走らせました。枕木は鉄製で、鉄道連隊から派遣された兵士が運転しました。

その後大正3年5月には、三里塚から分岐して八街行きが開業しました。当時の時刻表を見ると、成田―多古間が約2時間、三里塚―八街間が1時間を要しています。時速に換算すると10km前後のスピードで走行していたことになります。また線路の状態が悪く、1日に5回も脱線したという記録が残っています。

戦前、三里塚から成田中学へ通う学生たちは、雨や雪に関係なく遅れていたのが、東成田駅（寺台）で列車遅延証明書をよくもらっていたそうです。また、平林たい子の小説『結婚』の中に、「軽便鉄道は玩具のようで、汽車がカーブを曲がる時には、客がとび下りて立小便してまたとびのっても間に合う」と書かれています。

このようにのんびりとした鉄道は、地元の人々に愛されましたが、太平洋戦争の影響で強制撤去され、昭和19年1月に営業廃止となりました。



蒸気機関車から出るスで山火事が起こるため、昭和5年以降ガソリンカーが導入された。景勝地漫画に「自動車とも、電車とも汽車とも何ともつかない怪物にのりけり」と書かれた。昭和3年製ガ201号、定員は30人

（上下2枚写真著作権所有者：橋本静江氏）



景勝地漫画「京成から水郷へ」の中の三里塚風景に描かれている汽車（昭和7年ごろ発行）

### 編集後記

芝にブルーベリーの栽培をしている所があると聞き、取材に出掛けました。2mくらいの低木に小指の頭ほどの実を付け、青紫色に熟していました。甘いのと酸っぱい実があるようで、1粒ずつ食べるより、5、6粒を口にほうり込んで食べる方がおいしいとか。目にいい果物として、人気を呼んでいるそうで

す。帰り道、雑木林を見つけ中に入ってみました。期待どおり、カブトムシやクワガタを発見。思わず童心に返って昆虫採集を楽しんでしまいました。みどり豊かなふるさと成田には、自然に触れることができる場所はまだまだたくさん残っています。